



十八世紀ドイツ文学の描く非ヨーロッパ像

著者	佐藤 研一
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	52
ページ	163-166
発行年	2009-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127111

特 集

十八世紀ドイツ文学の描く非ヨーロッパ像

序説

十八世紀ドイツは、大小三百あまりの領邦国家に分裂していたものの、フランスやイギリスなどと緊密な関係を保ちながら、ヨーロッパ全体の枠組みのなかで「啓蒙の世紀」を担っていた。この近代胎動期のドイツ文学を読むと、鬱勃と沸きあがる情熱や想念が、正直に「豊饒たる混沌」のまま描かれていて、おもしろい。新しい文学の創出のために、古典古代から同時代ヨーロッパの文学・思想全体までを視野に収めて、食欲に滋養を吸収する発酵期独特のエネルギーが伝わってくるのである¹⁾。のみならず、非ヨーロッパ世界も、従来とは桁違いに広く射程に入ってくる。

「啓蒙の世紀」は、キャプテン・クック（1728-79）やラ・ペルーズ（1741-88 頃）らの太平洋探検等により、テラ・インコグニタも消失して、世界が球面体としてひとつに結ばれることとなった。当代ヨーロッパ文芸が、南太平洋の島々や極東・シベリアやオリエント等との遭遇の衝撃を、生き生きと伝える舞台となる所以である。もっとも、オリエンタリズム研究は、啓蒙期の異文化受容の仮面を剥ぎ取って、近代的理性の攻撃的側面を看破した。それでは、当代ドイツ文学にも、しょせん単なる異国情緒や異文化征服の暴力しか読み取れないというのであろうか。だが、ゲオルク・フォルスター（1754-1794）の『世界周航記』*Reise um die Welt*（1777）は、非ヨーロッパと弁証法的関係に立ってヨーロッパの蛮行を糾弾し、ヘルダー（1744-1803）も複数座標軸の視座から、歪曲された非ヨーロッパ像を論難するのではないか。当時の作品に虚心に耳を傾けると、異文化との衝突から生まれるヨーロッパ自身の創造的な変化もまた、聞き取れるのではあるまいか。

本特集では、以上の点を念頭に置きながら、どのように十八世紀ドイツ文学が非ヨーロッパとの遭遇の衝撃を受け止めたのか、詳らかにしたい。なかでもイスラーム文化圏に焦点を定めて、その強烈な個性に対する姿勢を解き明かしたい、

1) この視点に立って、本特集の執筆者宮本、笠原、水上、佐藤らが編んだ論文集がつぎである。「十八世紀ヨーロッパのなかのドイツ文学」（佐藤研一編）（日本独文学会研究叢書第26号）2004年。

と思う。というのも、ヨーロッパにとって、イスラーム文化圏は、永らく不仲の「隣人同士」であったからにはほかならない。以下、特集の各論考に備えて、かかる「隣人同士」の関係を、まず宗教上、ついで軍事上に絞って、簡単に記しておこう。

そもそもイスラームは、キリスト教やユダヤ教と同様、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」を仰ぐセム的一神教であるが、キリスト教の三位一体論を偶像崇拜として駁撃して、神の子イエスの存在を認めない²⁾。そのうえ、一夫多妻制はキリスト教の厳格な性のタブーを挑発し、軍事的拡大もヨーロッパの恐怖心を煽った。それゆえ、ヨーロッパが、イスラームを「暴力的」で「好色」な「偽預言者」ムハンマドの説く「邪教」と断じたのは、異とするに足りない。

たとえば、「啓蒙の世紀」の開幕を告げるツェドラーの『学芸大百科事典』*Großes vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste* (1732-54) もまた、ムハンマドを「世俗の使いの偽預言者」と言い放つ³⁾。しかもかれの「狡猾さ」や「暴力」のみならず、「快楽や罪深い肉欲におもねる宗教の性質」も与ってイスラーム勢力が広がったと強弁して、つづける。「一夫多妻制は、好色な東方民族にとって、実にふさわしい」と⁴⁾。万人の啓蒙に仕えるはずの百科事典の偏見に、現代のわれわれは驚かざるをえない。だが、このような記述から、「邪教」イスラームという通念の根強さを推し量ることもできよう。

近世ヨーロッパにとって、イスラームの脅威とは、オスマン帝国のそれにほかならない。もっとも、ヨーロッパからみれば、トルコもベルシャもインドも区別しがたかったにちがいないが。さて、1453年、オスマン帝国はメフメト二世（在位1444-46、1451-81）の下、ビザンツ帝国千年の都コンスタンチノーブルを手中に収めて、ルネサンス時代のヨーロッパに衝撃を与えた。さらに、スレイマン大帝（在位1520-66）はドナウ川を北上、1521年にベオグラード、1526年にハンガリーと矢継ぎ早に侵攻し、ヨーロッパにおける地歩を固めた。そして三年後、ついにハプスブルクの帝都ウィーンを包囲するにおよび、宗教改革に揺らぐキリスト教世界を震撼させたのである。第二次ウィーン包囲は、その百五十余年後の1683年である。かくして、トルコ人は恐怖の的となり、「野蛮人」と称されることとあいなる。いうまでもなく、現実のオスマン朝トルコは、東西交易の繁栄のうちに芸術や学問の花を咲かせていたのであるが。

ここで、ウィルソンに倣って、「トルコの脅威（Türkengefahr）」について一言

2) 井筒俊彦訳『コーラン』（全3巻、岩波文庫、2004年）上巻、31頁、148頁、160頁および同下巻311頁参照。井筒俊彦『イスラーム文化』（岩波文庫、2004年）、68-72頁参照。

3) Johann Heinrich Zedler (Hrsg.): *Großes vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste*. Bd. 19. Halle/Leipzig: Zedler, 1739 [Repr. Graz: Akad. Druck- und Verlagsanstalt, 1983], Sp. 482. なお、この見方は、ピエール・ベール著『歴史批評辞典』（1696）にも共有されている。Pierre Bayle: *Dictionnaire historique et critique*. Nouvelle ed. augm. de notes extraites. de Chauffepie, Joly etc. t. X. Paris: Desoer, 1820-24 [Genève: Slatkine Reprints, 1969], pp. 54.

4) Zedler, *Universal-Lexicon* (Anm.3), Sp. 489.

触れるならば、オスマン軍は、ベオグラード和約（1739）によりセルビアや西ワラキア奪還を遂げ、十八世紀半ばまで、いまだなお脅威的であった。その軍事力が決定的打撃を蒙るのは、第一次露土戦争（1768-74）の時である。それゆえ、1771年、皇帝ヨーゼフ二世（在位 1765-90）は、南下政策を進めるロシアを警戒して、「この麗しき地方〔バルカン半島〕が、トルコよりも千倍も危険な隣人〔ロシア〕の手中に収まることを、許してよいのか」⁵⁾と記すのである。しかも 1780年代に入れば、ロシアと結託して、「ヨーロッパのトルコ」、すなわちバルカン半島への進出をもくろむに至る。「トルコものオペラ（Türkenoper）」がヨーロッパじゅうで一世を風靡するのが第一次露土戦争とほぼ同時期なもの、偶然ではない⁶⁾。このウィルソンの所説は、トルコの脅威が第二次ウィーン包囲失敗以降に消滅するという通説を、正しく反駁したものとして読まなければならない。

いずれにせよ、こうしてトルコは、いまや、エキゾチックな隣人として、美術、建築、音楽、文学などの各分野で時好に投ずることとなる。もっとも、かかるトルコ像の大半が、バロック演劇における「野蛮・好色」のトルコ人像を単に逆転するだけの観念的なものに堕しがちではあったのだが――。

最後に、各論文についてごく簡潔に紹介すれば、つぎのようになろう。

まず、笠原論文は、イスラーム教徒の弁論が登場するレッシング初期の特異な論文作品『カルダースス弁論』（1754）を論究する。その際、当作品の理解の鍵をピエール・ベール著『歴史批評辞典』（1696）に求め、両者を比較考察する。それを通して、いかにレッシングが、ベールの寛容思想を引き継ぎつつ、他方で、イスラームをキリスト教と対等視することによって、ベールも共有していた伝統的イスラーム像を転換したのかを、明らかにする。最後に、『カルダースス弁論』は、論述の語の多義性と弁論による論述の中断によって、宗教の複数性を思考することを促すべく構成された作品である、と結論づける。

ついで、佐藤論文は、J.M.R. レンツによるプラウトゥスの翻案劇『トルコの女奴隷』（1774）や『アルジェの人々』（1775 作）の異邦人像に考察の的を絞って、「トルコものオペラ」とも比較しながら検討を加える。その結果、「トルコものオペラ」の感傷的かつ図式的な描写と対蹠的な特色、すなわち諷刺的諧謔の精神に支えられる独特の文学世界が浮き彫りにされる。それを踏まえて、レンツの翻案劇には、ヨーロッパの自己批判的精神の契機もうかがわれる、と指摘する。

また、宮本論文は、ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュがフランスやオランダやイギリスを旅行の際（1784-1786）、東インド会社が植民地から収奪した富や奴隷

5) Aus der Zeit Maria Theresias. Tagebuch des Fürsten Johann Josef Khevenhüller-Metsch, kaiserlichen Obersthofmeisters, 1742-1776. Hrsg. von Rudolf Graf Khevenhüller-Metsch und Hans Schlitter. Wien: Adolf Holzhausen, 1925, S. 339f.

6) Vgl. W. Daniel Wilson: Humanität und Kreuzzugsideologie um 1780: Die „Türkenoper“ im 18. Jahrhundert und das Rettungsmotiv in Wielands *Oberon*, Lessings *Nathan* und Goethes *Iphigenie*. New York u.a.: Peter Lang, 1984, S. 17-20 und 32.

を目の当たりにして驚愕し、小説や随想録にムガル朝インドを登場させた点に着目する。しかもラ・ロッシュは、長男フリッツがアメリカ独立戦争に参戦したり、結婚後数年間アメリカで暮らしたりした点にも関心を惹かれて、南北アメリカもまた小説の題材とした。そこで、ムガル朝インドのみならず、南北アメリカ先住民も考察の対象として、非ヨーロッパ像の描写の特色を読み取る。

さらに、ゾンダーマン論文は、永らく埋もれていたディックの悲劇『アリ・ベイ、エジプトのスルタン』(1797)を「発掘」したものであるが、実証的な文献学的手法を通して、当作品成立に関わる数々の原資料を明らかにする。この悲劇は、1773年の史実に基づき、オスマン朝専制体制に対するエジプトの反乱が内部抗争により頓挫する様を、「トルコもの」につきものの通俗的娯楽的要素——後宮の女たちのお喋りや宗教問答など——もなしに、冷徹に描く。しかも、プロシア・ロシアに対するポーランドの蜂起(1793-94)も重ね合わされている点も指摘する。

最後の水上論文は、まず、十八世紀精神の巨人ゲーテの『西東詩集』(1819)の反時代的な位置を、十九世紀ヨーロッパのオリент研究の枠組みのなかで見定める。ついで、『注解と論考』の翻訳論を手掛かりに、いかにかれがオリентに接近し、その文化を摂取しようとしたか、その独自の試みに考察を加える。さらに、詩篇「憤懣の書」を例にして、かれが学び取ったオリент的な詩の特質を、とりわけ「倨傲」という詩人の性格に焦点を定めて浮き彫りにする。それを踏まえて、ゲーテが詩人を「専制君主」になぞらえている点に着目し、いかにゲーテがオリент文化における専制的権力の問題を理解しながら、自分の詩的世界の創造に役立てたかを探る。

この五本の論考は、ドイツ文学史の表には出にくい低音部をなすドイツとイスラームの二本の纏れた糸を、手探りで解きほぐそうと試みたものである。近代社会が行き詰まり混迷を極める今日、あえて近代の原点である十八世紀ヨーロッパのドイツにもどって、非ヨーロッパ像、なかでもイスラーム像について考えを巡らすことは、日本の現実に暮らすわれわれにとっても、無意味ではあるまい⁷⁾。

(佐藤 研一)

7) 本稿の記述は、つぎの内容と一部重複する点があることをお断りする。佐藤研一「十八世紀ドイツ文芸にみるトルコ人像——モーツァルトの『後宮からの奪還』とヘルダーの『民謡集』を中心に——」『ヘルダー研究』(日本ヘルダー学会編)第13号(2007年)、23-49頁。